

歴史情報の宝庫としての三井文庫

石井寛治

『三井文庫論叢』が第四〇号の刊行を迎えるので、記念に何か書いてほしいと依頼された。そう言えば、ちょうど二〇年前に、第二〇号刊行を記念して数名の研究者が感想を寄せたとき、私も中堅研究者のひとりとして寄稿を求められたことがあった。その時は、嘱託研究員として二年間にわたって文庫に毎週一回通い、通うたびに閲覧史料から新しい史実を発見して興奮しつつ、「銀行設立前後の三井組」(『三井文庫論叢』第一七号、一九八三年)という論文を執筆したときの思い出を綴らせていただいた。それから二〇年を経て、再び原稿を依頼されたのは、もはや中堅ではない高齢の研究者であるが、数年前に、「維新时期大坂の手形市場——三井家と廣海家——」(『三井文庫論叢』第三六号、二〇〇二年)を執筆し、掲載していただいたためであろう。

そのように書くとき、いかにも私が、三井文庫を常時利用しているように見えるかも知れないが、決してそうではない。それは、私の研究テーマがあちこちへと広がってしまったためでもあるが、何よりも大学教員としての教育・行政の仕事が増えつづけて、まともな研究活動があまり出来なくなったためである。東京大学経済学部の大学院重点化その他の諸制度改革に、評議員・学部長などとして忙殺される一〇年近くを過ごしたあと、一九九八年に東京大学を定年退職して、東京経済大学に奉職したときの私は、もう一度研究者としてやり直す覚悟を固めていた。しかし、その覚悟だけでは、実際の研究活動はなかなか困難であることが間もなく判明した。いずれの私立大学でもそうであるが、東京経済大

学でも、激しい大学間のサバイバル競争の下で絶えざる教育改革が必要とされ、私自身も大学教育と学問研究を両立させることが困難な事態に直面したからである。

二〇〇〇年度から二〇〇一年度にかけての全学研究委員会の責任者に選出された私は、教育の担当者である教員の研究個室が一五平方メートルで書架がせいぜい九連しか置けないという劣悪な条件では、大学で落ちついて研究することは不可能であり、それでは教育改革もままならぬと考え、各研究室を一・五倍ないし二倍に拡張し改修する工事を提案した。理事会は、新築でなく改修で安く済むならばということで問題がなかったが、意外なことに教授会でそんな無駄な工事をするなどという反対意見が出され、その説得工作と利害調整に多大の神経と労力を費やしたため、堪え性のない私は体調を崩して病院通いをする羽目に陥った。幸い、二年がかりの漸進的な工事で改修が終わる見通しが立ったので、二〇〇二年度には、国内研究員の申請をして、研究者としてのリハビリテーションに努める許可をえた。永らく遠ざかっていた三井文庫に通おうと思いついたのは、この時のことである。

東京経済大学図書館には、京都の老舗両替商である万屋小堀甚兵衛家（万甚）の多数の帳簿類が所蔵されており、誰も利用するものがないなかったので、同大学へ赴任してからの私は、時間を盗んではそれらをポツポツ眺めていたのだが、国内研究員になった機会に幕末維新期の両替商金融の研究を本格的に行なおうと考えた。すでに着手していた近江商人丁子屋小林吟右衛門家（丁吟）の研究からは、主要取引先が万甚であることも判明していたので、小林家文書の見直しを通じて、両替商を利用する商人サイドからの分析と結びつけることも可能であった。また、名古屋大学の中西聡君たちと共同で調査していた大阪府貝塚市の米穀肥料問屋廣海惣太郎家の文書からは、同家が大坂両替商宛の手形を盛んに振り出して北前船主に支払っている事実が判明したので、大坂両替商の文書が見つかれば、大坂についても商人との取引を具体的に明らかにすることができると思われた。さらに、江戸については、三井両替店に関する文庫所蔵文書のほ

かに、国立史料館の播磨屋中井新右門家文書が利用できるはずであった。

従来の両替商研究は、大阪大学の宮本又次教授らのグループが鴻池善右衛門家（鴻善）について膨大な研究業績をあげており、三井文庫の館員の方々による三井両替店についての豊富な研究業績とともに、近世両替商研究の双璧をなしていた。これらを抜く水準の研究を行なうことは至難の業であり、とくに近代史から幕末期研究に新規参入しようとする私にとって、研究史の壁は当初きわめて高く感ぜられた。しかし、研究史を丹念に追って行くと、近世信用経済の頂点である大坂の鴻善についての研究は、一八世紀以降は、同家が大名貸に特化してしまうため、大坂商人の活動との関係がほとんど見えなくなってしまうことに気がついた。鴻善の活動をこれ以上詳細に検討しても、幕藩体制を基本的に維持する側面は見えても、それを突き動かし解体させて行く経済発展との関係は一向に明らかにならないのである。三井家は危険な大名貸を自制しつつ、幕府からの預り金を用いた商人貸を行っていたが、三井大坂両替店が大坂商人の手形をどのように扱っていたかは不明のままであった。両替商研究を少しでも深めるには、大坂その他の手形市場の分析をするしかないことに私は気付いたのである。

もちろん、そうしたことは、両替商の研究者には、周知の問題にすぎず、これまでそうした問題にメスが入らなかったのは、適切な史料が見つからないためであると指摘されてきた。大坂に関する史料があるとすれば、これまでも何人かの金融史研究者が部分的に検討して来た大阪大学経済学部所蔵の鴻池与三吉家文書か、さもなければ、やはり三井文庫所蔵の両替商関係文書だろうと見当をつけて、久し振りに文庫を訪れたのは、二〇〇二年八月一日のことであった。古い図書閲覧票はとくに期限切れとなっており、新しいものと切り替え、早速大坂両替店関係の史料を閲覧した。二〇年前と違うのは、すでに、一九九三年から、毎年一冊ずつ三井文庫所蔵史料の目録が刊行され、そのなかの『主要帳簿目録（大坂両替店等作成成分）』などによって、あらかじめ目指す閲覧史料の有無と史料番号を調べておくことができ

るようになったことである。これは閲覧者にとっては、大変な効率の上昇であり、私もきわめてスムーズに史料を閲覧することができた。

ところが、書庫から出していただいた三井大坂両替店の『手形帳』という帳簿を見てもさっぱり読み方が分らない。館員の賀川隆行氏に伺っても、分析したことはないということで、分らないと言われる。そうした場合は、同時点のさまざまな帳簿を付き合わせることによって、一步一步解釈して行くしかないという史料分析の基本に立ち返って、ノートを取りながら少しずつ考えていった。その結果、『手形押切帳』との対応関係はいちおう分ったが、困ったことに基本をなす決算帳簿との数値がまったく符合しない。いろいろ考えた末、当時の手形差引は今日の手形裏書と違って裏書責任がないので、手形取引は、貸借とは別扱いとされていることに気付いた。こうした調子で、七軒の差引先両替商との関係をずっと追いつけて行き、それぞれの相手の実態についても、書状や関係史料を次々と探し出しては解読することを通して突き止めて行った。帳簿だけでは何のことか理解できないことも、関係文書を丹念に見ていくとズバリと分ることがしばしばあった。三井大坂両替店の日記からは、慶応四年の大坂両替商の連続倒産が、通説のいう五月の銀目廃止を契機とするのではなく、それに先立つ正月の鳥羽伏見の戦いのあとにすでに起こっていたことも確認できた。そのことが判明した日に、私は余程嬉しかったと見えて、手帳に「文庫史料は無尽蔵なり」と書き記している。

こうして、何とか手形差引センターとしての三井大坂両替店の活動概要について、いちおうの見当をつけ、貝塚の廣海家サイドからの分析と合わせて、前述の論文「維新时期大坂の手形市場」を仕上げ、三井文庫の賀川さんに渡したのが、二〇〇三年二月三日のことであった。私の六五歳の誕生日であり、京都と江戸に関するものと合わせて三本の論文を同時に仕上げたので良く覚えている。慣例の締め切り期日よりかなり早く原稿を受け取った賀川さんは、一瞬ギョツとされたようであるが、私としては、同年五月に予定された、東京経済学会全国大会までに三本の論文

が刊行されていないと困るので、大急ぎで仕上げたのであった。本来ならば、関係史料を可能な限り博搜した上で、時間をかけてじっくりと分析すべきであり、二〇年前には、二年間かけて論文内容がしだいに熟成するのを待つ余裕があったが、今回は一年間の国内研究員の期間のうちの半年しかこの論文の調査・執筆に充てることができず、帳簿内容を十分に読み切れないまま成稿したため、若干の悔いが残ったが致し方ない。若い研究者が、この論文を土台に、より精密な分析をして下さることを期待することにした。

二〇〇三年五月の社会経済史学会大会の共通論題は盛會裡に終わり、私の報告「明治維新期の京・大坂・江戸における両替商金融」に対しても多くの出席者から批判していただいた。私にとって、もつとも気になった実証上の欠陥は、肝心の大阪両替商による商人金融の実態分析が不十分だったことであつた。三井大坂両替店は、確かに商人が振り出した手形を扱っているとはいえ、直接に商人と手形取引をしたのではなく、他の七軒の両替商との間で手形の差引をしていたに過ぎなかつたからである。この空白を埋めるには、やはり大阪大学に出掛けるしかないと考えていたが、廣海家文書の研究のまとめなどに時間を取られてなかなかその機会がなく、漸く二〇〇六年二月になって同大学を訪れ、鴻池与三吉家文書を閲覧させていただいた。これまでの諸研究は、なぜか同家の一冊の帳簿の最初部分だけを取り上げて議論するのが常であつたので、私は持参のデジタルカメラによって分析しようとする帳簿三冊を丸ごと撮影した。帰宅後、自宅のパソコンで検討すると、果せるかな従来の諸研究は、親両替である加嶋屋作之助家（加作）との関係を完全に見落とし、それと無関係な部分だけで議論するという致命的な誤りを犯していたことが判明した。

こうして鴻池与三吉家文書を見ているうちに、私は、三井文庫にも似たような帳簿があつたことをぼんやりと思い出した。そこで、早速前述の『主要帳簿目録（大坂両替店等作成分）』を調べてみると、最後の部分に記されている三井の別家越後屋善太郎家（越善）の帳簿がそれであることが分つた。三月になってから三井文庫を再訪し、帳簿九冊全部

を借り出して机の上に並べて比較検討してみたところ、一八二七年（文政一〇）については、『大福帳』と『当座帳』が揃って残されており、両者の突き合わせができるという絶好の史料条件のあることが判明した。調べてみると、越後屋善太郎家は、三井両替店でなく、加嶋屋作之助家を鴻池与三吉家と同様に親両替にしており、越善は受け取った手形のほとんどを加作に預けるとともに、支払い請求に対しては、加作宛の手形で支払っていることが詳しく判明した。さらに、越善が振り出す「預り手形」は、越善宛に商人が振り出した「振り手形」のわずか四％程度にしかならないことも判明した。

鴻池与三吉家と越後屋善太郎家に関する分析は、「幕末期大坂の中規模両替商による商人金融」という論文に纏めて、東京経済大学の紀要『東京経大会誌』二五二号（二〇〇六年）に発表することになった。そこで、既発表の諸論文を大幅に書き改めつつ執筆した著作『経済発展と両替商金融』を、二〇〇七年度中に、私の東京経済大学時代の研究成果のまとめとして刊行したいと考えている。

こうした研究を曲がりなりに完成できたのは、何といっても三井文庫の所蔵史料を利用することが許されたためである。もちろん、今回の私の両替商研究にさいしては、東京経済大学、大阪大学経済学部、東京大学法学部、国立史料館、近江商人郷土館、あるいは、貝塚市民図書館郷土資料室などに所蔵されている文書類の利用が、それぞれ大きな役割を果たしたが、肝心の大坂両替商による商人金融の実態と推移について、両替商サイドからもっとも詳細な歴史情報を提供してくれたのは、三井文庫の所蔵史料であった。これまでも三井両替店の活動については、『三井事業史』第一巻（一九七一年）や『三井両替店』（一九八三年）がいわば正史として刊行され、賀川隆行『近世三井経営史の研究』（一九八五年）がさらに実証を深めた結果、三井両替店全体の基本的な活動実態については、ほぼ究明され尽くしたと言ってよいかも知れない。私の研究は、そうした正面作戦では見落とされてきた活動部分についてのささやかな研究に過ぎ

ないが、従来の諸研究が三井からの大名貸や商人貸の分析に力を注ぎ、それらの不良債権化によって三井両替店の経営も幕末には行き詰まっていく様相を描き出していたのに対して、それらの分析が捨象した手形（＝小切手）市場との関係を取り上げることに、幕末両替商の活動と近代的銀行のそれとの類似性をクローズアップすることができたように思う。さらに話を広げれば、今日の間接金融体制の歴史的起源は、明治政府の殖産興業政策よりも、幕末の両替商金融にまで遡って把握されねばならないとすら思われる。そうした新しい維新経済史像を私に提供してくれるものになった三井文庫の所蔵史料は、文字通り歴史情報の宝庫であり、今回の研究を通じて、私は、所蔵史料の読み直しを通じて、確かな史料分析に基づく歴史像の再構成が今後とも繰り返し可能になるであろうことを予感させられた。

日本橋の三井美術館の完成により、これまで社会に広く公開され難かった貴重な文庫の所蔵美術品が多くの人々の目に触れるようになったことは大変喜ばしいことである。一流の美術品は何度見ても新たな感動を呼び起こすが、私は、文庫が所蔵する文書類を見ても同じような感慨を抱くことがある。歴史文書は、それを分析する研究者の問題設定の仕方と分析の力量によって、全く新しい相貌をもって立ち現われることがあるのである。早い話が、日本近世・近代史を三井に代表される商人・金融業者の活動に即して分析するということが、いわゆる戦後歴史学の全盛期には、ほとんど重要視されなかったのであって、商人研究が多くの研究者の関心を集めるようになったのは、日本ではたかだか最近の四半世紀のことに過ぎない。

今後、『三井文庫論叢』に、文庫の史料を使って、これまでの歴史の見方を覆すような論文が次々と登場するようになれば、そして三井文庫の目録が相次いで刊行され、新しい史料が収集・整理・公開されるようになれば、三井文庫を訪れる老若の研究者は、きつとその数を大きく増すことであろう。そうなれば、現在のあの二階の隅にある狭い閲覧コーナーは満席となって、文庫としては、閲覧コーナーを拡張するか、さもなければ予約制にするという選択を迫られる

ことになろう。そうした状況を一日も早く引き寄せるために必要なのは、何といっても、文庫で三井関係文書を収集・整理するとともに、自らも実証分析をするという労苦多い仕事に携わる館員のマンパワーの強化・充実である。バブル崩壊後の景気低迷を理由に、永いこと減りっ放しであった文庫専属の文書研究者の数を、この機会にそろそろ元通りに回復することを、理事会として是非考えていただきたいと思う。